

# フッサール他者論の時間差解釈

渡辺 恒夫  
(明治大学／東邦大学)

他者の、たとえば笑顔を「笑」顔として認識すること自体、他者を直接知覚することになるという直接知覚説が現象学とそれ以外とを問わず存在するが、私には理解不可能に感じられる。本論考ではこの理解不可能性の正当化を、フッサールの自他の等根源性の要請に求める。まず『デカルト的省察』での他者論への K. ヘルトによる批判を紹介する。次にフッサール他者論の動機が、等根源性の要請に発していることを明らかにする。そして、他者は時間を異にする《私》としてしか構成されないことをフッサールは自認すべきであったという、時間差解釈を提起する。

なお、本研究は文献学的研究ではなく、現代心理学的に技法化した心理学的現象学(＝フッサール心理学)による、子供の自我体験・独我論的体験(＝発達性エポケー)の研究に基づいているが<sup>1</sup>、ここでは過程を省略してヘルトによる批判から出発する。

## § 1 フッサールの他者論とヘルトの批判

『デカルト的省察』(浜渦辰二訳、岩波文庫)での他者論は5段階に要約される。

①独特なエポケーを受けた「私に固有なものの世界」の中心に位置するのは私の身体である。②そこに一つの「物体」が現れるとする(他者の身体なのだが、まだ「身体」という意味を持たない)。③物体は私の身体に似ている。そこで「対化」の現象が起こり、類比的統覚によって物体は「身体」の意味を獲得する。④この、新たな身体を自己の身体とする他者と、他者にとっての現象世界とが、私と私にとっての現象世界の「志向的変様」として現れる。⑤志向的変様とは、「ちょうど私がそこにいる時のように」そこから現象的世界がひらけ、その中心としての身体を「ここ」とする「他の私」(他我)が構成されるということと考えるよい。

これに対するヘルトの批判は、次のようなものである。

「ちょうど私がそこにいる時のように wie wenn ich dort wäre」という話法を、あたかも私がそこにある石像であるかのように空想するのと同じ非現実話法(als of ich dort wäre)だとすると、私は現にここに居るし、そこに石像として居ることは非現実だと知っているので、「他の我」など構成されない。ところがフッサールは、「ちょうど私がそこにいる時のように」に別の意味、「もし私がそこにいるのであれば wenn ich dort wäre」という可能話法の意味をも担わせようとする。ところがこの第二の意味では、私は現在そこに居ないので、私がそこにいるという事態は、過去か未来にしか実現しなくなってしまう、フッサールの構成した「他者」とは過去か未来の「私」であるということになってしまう。おまけにフッサールは、これら二種類の全く違った意識のはたらきの「協働」によって他者を構成しようとしたフシがある<sup>2</sup>。

§ 2 等根源性(Greichürsprunglichkeit) : 他者も「ここ」に居なければならない  
なぜフッサールは、シェーラーやメルロ・ポンティのように直接知覚説に訴えず、

このような問題の多い類比化的統覚説を作ったのだろうか。直接知覚説では他者をその笑顔、その泣き顔において知覚することになり、決して「ここ」にならないからだ。「発達性エポケー」の経験的研究が示唆するところによると、「存在Aに意識がある」ことの根源的体験が「Aはここで意識している」であり、「ここ」で意識する存在は私以外にない以上、意識がある存在は常に私として同定されるのである。

#### 【文献1に引用された自我体験事例】

6歳か7歳くらいの頃、ある晴れた日の正午ちょっと前、二階の部屋にいて、窓からさしこむ日差しをぼーっと見ている時に、「私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう」と思った（20歳/女性。下線、引用者）。

直接知覚であれ間接的な推論や感情移入によってであれ、そこに認識された他者は私と等根源的ではない。等根源的な他者とは、ここにいてここから世界が開ける「モノダの中心」でなければならない。けれども、ここに居るのは私であって他者ではない。これはパラドクスであり、発達心理学的には独我論的体験の淵源となる。

#### § 3 時間差解釈：他者とは時間を異にした私である

ヘルトの批判（フッサールの構成した「他者」とは過去か未来の「私」であるということになってしまう）をあえて真に受けて、他者とは過去か未来の私であると理解することこそ、他者を等根源的に理解する途であろう。内的視点に忠実である限り、「他処のここ」としての他者を理解可能にする唯一の途は、「<他のここ>は、かつて/いつか、<此処のここ>だった/になるだろう」なのである。もちろん、多数の他者が私と同時に存在するよう見える以上、私も同時に多数併存するという別のパラドクスが生じるように思える。けれども哲学的分析によると<sup>3</sup>、主観的な自己と他者の同時性は、第三者による外的視点を採らない限り保証されない。等根源的な他者とは、「その他者が私であるような世界」であり、これがフッサールの言う「モノダ」だが、もしモノダが複数存在するならば、モノダ間の理解可能な関係は空間的[同時併存]関係でなく時間的關係しかない。

#### § 4 展望

ヘルトが言うように、過去か未来かに私が他の誰かであると想像することは、虚構意識ではなく可能意識である。ならば、「可能」が「現実」になるための世界モデルを構築することも、自他の等根源性を確保する途となろう。中込照明は唯心論物理学を試みてモノダ論と銘打ったが、モノダ間の関係は予定調和による<sup>4</sup>。けれども内的視点に徹する限り、モノダ間には時間的關係しか考えられない。私は物理学者ではないので、本研究をあくまで心理学的現象学として志向的意識の分析にそって進めるが、フッサールも他者を「私の時間化」と言うように、志向的意識の構造で他者に最も近い存在は、「いかなる記憶もない過去のある日の私」である。したがって、他者とは「もはや想起できない/未だ予期できない」私である、ということになる。

1 渡辺恒夫『フッサール心理学宣言：他者の自明性がひび割れる時代に』講談社、2013。

2 クラウス・ヘルト「相互主観性の問題と現象学的超越論的哲学の理念」『現象学の展望』（新田義弘・村田純一編、国文社、1986）所収。

3 青山拓央「客観的現在と心身相関の同時性」『科学基礎論研究』Vol. 33, 25-29, 2005。

4 中込照明『唯心論物理学の誕生』海鳴社、1998。